

BCCWJ を活用した接尾辞「-み」の実態調査

宮内 佐夜香

1 はじめに

近年接尾辞「-み」が従来付加しなかった語に付く現象（「嬉しみ」「やばみ」「ママみ」「固有名詞+み」等）が広がりを見せており、この新用法に着目した研究が進んでいる。その際には当然従来の「-み」の用法を踏まえた考察が行われているが、各種の事情により従来の「-み」の全体像の把握が不十分であるように思われる。「-み」には確かに使用の拡大が認められるが、名詞化接辞としてどのような点が変化したのかを追究するためには、従来どのような語に「-み」が付加し得たのかを精査した上での比較も必要だろう。

そこで本稿では実例としてどのような語に「-み」が付くのか、国立国語研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（以下 BCCWJ）の形態論情報を利用して実態を調査した。BCCWJ は 1 億語規模の「現代日本語書き言葉」の縮図として設計されており、「現代日本語書き言葉」全体の傾向調査に適した資料とみなしてよいだろう¹。BCCWJ によって従来の全体像を示すことで、接尾辞「-み」研究の発展に寄与する基礎的データを提供したい、というのが今回の調査を行ったそもそもの動機である。

ただし、BCCWJ の形態論情報は「-み」のような短い要素を抽出するには必ずしも向かない側面がある。そのような短い要素を探索する際の BCCWJ の活用方法を示すことも本稿の目的の一つとし、やや多めに紙面を割いた。

2 問題の所在

2.1 「-み」の生産性

従来の接尾辞「-み」の生産性の低さはこれまでさまざまに言及されているが、実態として「-み」の語基の総体はどのようなものなのであろうか²。

先行研究における従来の語基の確認を見てみると、中でも網羅的と言えそうなのは宇野 (2015) の方法である。宇野 (2015:106, 100-99) は林・斎藤・飯田 (1973) 「古今形容詞一覧」に「近代語として登録された」724 語について、『日国二版』に立項され、かつ BCCWJ (少納言版) に用例が見られるものを「従来のミ形」、それ以外で Twitter に見られるものを「新しいミ形」とする等の判別を行い、その結果「従来のミ形」は 30 語程度と限られることを示す³。このように形容詞については「-み」の新旧語基の実態が確認されている。

しかし「-み」は形容詞に限らず形容動詞にも付くことがあるのは一般の国語辞典等でも指摘されているとおりであり⁴、その他の品詞の例も観察される。杉岡 (2005:78-79) は接尾辞「-さ」と接尾辞「-み」の違いに言及する中で、「-さ」の付加は「形容詞」「形容名詞」(形容動詞語幹を差す)に限定されるが、「-み」はそれ以外の品詞にも「拡張的に付加され」ることを指摘し、非自立の形式(「正味」「妙味」等)、名詞(「人間味」「野性味」等)、動詞(サ変漢語を差すものと思われる。「円熟味」「凝縮味」)、擬態語(「とろみ」「つるみ」等)の事例を挙げる⁵。これについて杉岡 (2005:79) は、「-み」が「固有にもつ意味」は「一般的にある属性の具体的な感覚を名詞として表現する」ことであり、それによって「性状や形状を表す語彙であれば、品詞の制限を超えて拡張的につくことが可能」であると述べている。

この杉岡 (2005) の指摘からは、「-み」は「-さ」があらゆる形容詞に付くということに比しては生産性が低い、「性状や形状を表す語彙であれば」品詞を限定しないという点では「-さ」以上の生産性をもつ、のようにも言えるのではないだろうか。このことは「-み」の語基の総体を考える上で非常に示唆的である。ただし杉岡 (2005) の論考は接尾辞の文法的・意味的機能の追究を目的としているため、語基については分析のためにいくつかの事例を挙げ

るにとどまる。稀少な実例も挙げられておりその語基範囲の広さがうかがえるが、ほかにどのような語に実際に付くのかという疑問への答えは得られない。

あらゆる調査について同じことが言えるが、未知の語の出現を確認するにはある程度規模の大きい資料群を「しらみつぶし」にあたるという手段しかない。そのため「-み」の全体像の追究は（疑似であっても）困難であったし、あまり着目されてこなかったものと思われる。

以上の接尾辞「-み」研究の現況を踏まえ、本稿では形態論情報を利用してBCCWJにおける「-み」の語基の可能な限りの網羅的抽出を試み、リストアップすることを第一の目的とする。加えて、その結果について杉岡（2005）の論考から示唆される「-み」の生産性（拡張性）という観点から考察する。

2.2 「-み」の語基の特徴

次に「-み」の語基となり得る語の特徴について確認する。

「-み」の語基については、影山（1993:16）が「「-み」はごく限られた表現にしか起こらず、とりわけ単一形態素である語根だけに付く。語根と語根が複合して得られる語幹には付かない（*肌寒-み、*奥深-み）」と述べている。水野（2017:171）は、BCCWJにおいて形容詞に「-み」が付く事例は影山（1993）の言う「単一形態素」が29語で「複合基体」が「生臭み」1語のみであるため、従来の実態は影山（1993）の指摘とおおむね合致すると述べる。対してTwitterにおいては「複合基体」の事例が増えていることを示し、従来との違いとして指摘している。これによって語構成上の制限の実態が確認されているが、宇野（2015）と同様の手法で先に形容詞リストありきで行った確認であり「複合基体」が網羅されているとは限らないため、本稿での網羅的抽出によって同じことが言えるかどうか、念のための確認を行いたい。

語構成の特徴以外に「-み」の語基の意味的特徴についても整理しておく。多くの「-み」研究は「-み」がどのような意味を付加する接辞であるのかを追究することに論の中心があるため、語基側の考察は多くない。

前述のように杉岡（2005）は「性状や形状を表す語彙」と指摘するが、品詞を制限しないことに関する言及で、その語彙の範囲については触れられない。

小出（2000）は接尾辞「-み」と「-まる」の意味的共通性を論じる中で「-

み」の付く形容詞の特徴を指摘している。次元形容詞では「深い」「厚い」のような「立体的な内部空間をイメージさせる」ものには「-み」が付くが、「長い」のような「外形的特徴を言うもの」には「-み」が付かないこと、感覚形容詞は味覚、嗅覚のみで、これは「モノの内的な属性を表現する」ものであること等の検討をし、キーワードとして「内部性」を挙げる（小出 2000:6-9）。そして「このような認識の表現は、すべての形容詞に可能なものではない。限られた範囲の形容詞に備わった性質である」とまとめる（小出 2000:10）。抽象的議論で難解なところもあり、その「限られた範囲」の語のさらなる具体的検討が必要であるが、語基の性質の一面を示す貴重な観察である。

意味の特徴は形態的特徴とちがって簡潔には述べがたいところがあるが、ひとまず以上の杉岡（2005）、小出（2000）の指摘を踏まえ、制限はない可能性も視野に入れつつ BCCWJ に現れる「-み」派生名詞の観察を試みる。

3 BCCWJ の検索

調査には BCCWJ 「中納言」版⁶の短単位検索を利用し、全体像の確認が目的であるため検索対象は「全て」とした⁷。

国立国語研究所が用いる語の認定単位である「短単位」は、複合語の語認定の原則として、連続する最小単位（形態素にあたる）が語構成に応じて 1 回結合したもののまでを 1 短単位とみなす（例：| 冬 / 休み | 明け |⁸）が、一部例外的に、最小単位が連続していても結合させずにそれぞれを 1 短単位とみなす場合がある。その例外の一つが「接尾的要素」で、たとえば「-終わる」「-さ」のような生産的な複合語・派生語の要素については、それぞれを 1 短単位とするというものである（例：| 優し | さ |⁹）。

しかし接尾辞「-み」はこの「接尾的要素」に含まれない。そのため「-さ」であれば、短単位情報で「品詞：接尾辞」かつ「語彙素：さ」のような条件でほぼ一括で抽出できるが、「-み」の場合は「| 温かみ |」で 1 短単位であったり「| 真剣 | 味 |」と 2 短単位であったり、同じ条件では抽出できない状況にある。さらに、BCCWJ のデータの多くは自動形態素解析に任せた情報であり、解析辞書が処理しきれない形で「-み」が用いられていた場合、誤解析が

発生している可能性がある。

以上のデータ特性を考慮し、できるだけ多く「-み」を抽出するための条件を考えたものが下記の検索条件1~4である。「中納言」の検索式の記号をそのまま示した¹⁰。

検索条件1：名詞「-み」の抽出

キー：語彙素 LIKE "%み" AND 品詞 LIKE "名詞-普通名詞%"

検索条件2：接尾辞「-み」の前方共起語抽出

キー：書字形出現形 LIKE "%"

AND 後方共起：(品詞 LIKE "接尾辞-名詞的%" AND 語彙素読み="ミ")

検索条件3：名詞「-味」の抽出

キー：語彙素 LIKE "%味" AND 語彙素読み LIKE "%ミ" AND 品詞 LIKE "名詞-普通名詞%"

検索条件4：誤解析で接尾辞以外の品詞が付けられている場合の探索

キー：書字形出現形 LIKE "% AND 後方共起：語彙素読み="ミ"

及び

キー：語彙素読み="ミ" AND 前方共起：書字形出現形 LIKE "%"

検索条件1は「|温か/み|」などの1最小単位+「-み」が1短単位となっている事例を抽出するための条件である。ヒット数108539件、異なり語彙素数534件で、当然多量の無関係の語が含まれるが「-み」派生名詞を網羅的に探す方法はこの条件のみであると思われる。無関係の語は主にマ行五段活用動詞の連用形型名詞（「読み」「飲み込み」等）¹¹や「こめかみ」等の名詞である。表計算ソフトで整理しつつ目視確認した結果、接尾辞「-み」用例はこのうち延べ6756件、異なり語彙素数39件であった。

検索条件2は接尾辞「-み」の前に来る語を抽出する条件である。接尾辞「-み」はBCCWJの情報上は語彙素表記「味」、品詞「接尾辞 名詞的 一般」

であるが、出現例が平仮名表記であった場合、誤解析で同音の異なる接尾辞として解析されている可能性もある。それを考慮し、同音の接尾辞である「み」（古典のミ語法）と「見」（「見る」由来の名詞化接辞）も含まれる条件を設定した。ヒット数 1843 件、異なり語彙素数 429 語¹²で、「| 現ノ実 | 味 |」「| 有りノ難 | み |」などの 2 最小単位で構成される短単位に「- み」が付いたものや、「悔し | み」といった解析辞書に登録がなかったために分割された「形容詞語幹 + み」等が発見された（短単位ルールとしては本来「| 悔しノみ |」）。検索結果には同音異義の接尾辞¹³のほか、「味（ミ）」として解析されているものの実際は「アジ」と読むべきもの（「チョコ味」「中華味」等）が多数含まれる。これらを除外した結果、接尾辞「- み」と認められる用例は延べ 513 件、異なり語彙素数 63 件（誤解析により検索条件 2 と重複する語 7 件を含む）であった。

検索条件 3 は 1 に類した検索で、1 短単位となっているもので語彙素表記が「- 味」のものを確認するための条件である。語彙素表記「甘み」に対して語彙素表記「苦味」となっていたり、「| 有りノ難 | み |」に対して「| 有ノ難ノ味 |」という語彙素が別に存在するなどの不整合もあり（後者は明らかなエラーのように思われる）、検索条件 1、2 から漏れる事例が少数ながら取得された。ヒット数は 63027 件、異なり語彙素数 65 件、大半は「意味」「興味」等の無関係の漢語である。ここから延べ 697 件の用例、異なりとしては「苦み」「凄み」「色み」とエラーと思われる「有難み」の計 4 語を抽出した¹⁴。

検索条件 4 は接尾辞部分が接尾辞として正確に解析されていないケースを想定したものである。大規模コーパスは誤解析があることを前提としてそのまま統計等に使用することが多いが、今回のように未知の語を探る場合にはこのようなイレギュラーの探索も必要であると判断した。ヒット数は 39204 件であった。2 種の検索結果の表を結合させて整理し、すでに検索条件 2 で確認済みの「接尾辞 名詞的 一般」以外で、実際の表記が「み」または「ミ」（表記「味」は「接尾辞 名詞的 一般」のみ）のものを抽出すると、延べ 1654 件であった。これを目視確認した結果、延べ 9 件、異なり語彙素数 4 件（検索条件 1、2 と結果的に重複する語のみであった）の「- み」の用例が発見された。

以上の結果を整理すると、抽出された接尾辞「- み」の用例は計 7975 件、

語基は異なりで 98 語となった¹⁵。

4 BCCWJ の接尾辞「-み」

4.1 全体の傾向

3で抽出した「-み」派生名詞の全例を、語基の品詞及び「-み」派生名詞としての意味範疇の違い(以下タイプ。【 】で括る)に着目して分類し、各語の出現数を示したのが表1である¹⁶。

【形容詞】から【色】までは主として形容詞が語基のものである¹⁷。【味覚・嗅覚】は両方で用いる語があるためまとめた。【形状詞】としたものは形態論情報上で「形状詞」(形容動詞語幹)または「普通名詞 形状詞可能」の品詞情報が付けられているものである。表1に付した下線の意味は4.3で後述する。

表1: BCCWJ に発見されたタイプ別「-み」一覧・出現数

形容詞	場所	味覚・嗅覚	色	形状詞	名詞	オノマトペ	総計
重み 787	深み 490	甘み 869	赤み 354	新鮮み 36	色み 138	とろみ 271	
厚み 621	強み 425	旨み 725	青み 108	真剣み 17	現実み 135		
丸み 285	弱み 281	苦み 398	黄み 40	堅実み 2	人間み 83		
温かみ 232	高み 197	辛み 261	黒み 38	深刻み 2	現実み 49		
面白み 178	明るみ 193	臭み 150	黄色み 14	複雑み 2	人情み 35		
濃み 156	薄み 9	渋み 96	白み 14	滑稽み 1	野性み 20		
おかしみ 28		えぐみ 42	紫み 10	神聖み 1	外連み 17		
ぬくみ 23		生臭み 16	緑み 6	親切み 1	円熟み 6		
有り難み 17		果実み 10	グリーンみ 2	辛辣み 1	<u>金み</u> 6		
軽み 11		くどみ 1	ピンクみ 2	崇高み 1	古典み 3		
柔らかみ 5		しょっぱみ 1	銀色み 1	誠実み 1	官能み 2		
悔しみ 4		甘苦み 1	赤らみ 1	皮肉み 1	含羞み 2		
寂しみ 3		酸み 1		平淡み 1	<u>芸術み</u> 2		
まるみ 2		青臭み 1		<u>幽玄み</u> 1	個性み 2		
細み 2					娯楽み 2		
つらみ 1					<u>俳諧み</u> 2		
太み 1					<u>諧謔み</u> 2		
新しみ 1					1例の語 16		
計 2357	1595	2572	590	68	522	271	7975
名詞 1例の語： <u>エレクトロニックみ</u> ・ <u>エログロみ</u> ・ <u>ミステリーみ</u> ・ <u>哀愁み</u> ・ <u>喜劇み</u> ・ <u>教訓み</u> ・ <u>幻想み</u> ・ <u>詩み</u> ・ <u>自然み</u> ・ <u>情感み</u> ・ <u>洗練み</u> ・ <u>装飾み</u> ・ <u>土み</u> ・ <u>伝統み</u> ・ <u>迫真み</u> ・ <u>野趣み</u>							

【場所】【オノマトペ】は語基が限られているため以下扱わない¹⁸。その他のタイプの中には内省では出てこないようなものが、個々の出現数は少ないながら存在している。筆者の内省では【形容詞】「軽み」以下、【味覚・嗅覚】「くどみ」以下、【色】「紫み」以下、【形状詞】「堅実み」以下、【名詞】「金み」以下が稀な例であるように思われる。とくに【名詞】において稀な例のバリエーションが多い。この表1に示した結果について、4.2以下で考察を試みる。

4.2 語基の語構成の拡張

影山(1993)が指摘し水野(2017)が検証した単一形態素か否かという点については、原則から外れる事例として水野(2017)が挙げる「生臭み」以外に「甘苦み」「青臭み」「銀色み」¹⁹がある。用例は(1)(2)(3)のとおりである。

- (1) 天麩羅の衣の甘みと、春菊の甘苦味が何とも言えない美味しさ。

(OY03_00456,760 Yahoo!ブログ 2008)²⁰

- (2) 長時間煮てもアマチャヅルのサポニンがすべてできるものでもありませんし、青臭みとにがみがでて、お茶としてもまずくなってしまいます。

(OB2X_00160,16010 『みんなの薬草あまちゃづる』1984)

- (3) 完璧に均衡のとれた構図、静かで透明な光、青とグレーの銀色みをおびた色調 (LBh7_00036,61700 『メトロポリタン美術館ガイド』1993)

いずれも孤例であるが、さほど特殊な文脈での用例とは思われない。【味覚・嗅覚】【色】においては単一形態素のものの中にも「くどみ」²¹「しょっぱみ」、「紫み」「緑み」や外来語色名等あまり一般的ではない派生が起こっている。小出(2000)においても味覚・嗅覚については言及があったが、接尾辞「-み」のもつ「具体的な感覚を名詞として表現する」(杉岡 2005)機能から考えると、これらは人間の直接の感覚に関わる表現であり、接尾辞「-み」との親和性は高いものと思われる。可能性としてはあらゆる味覚、臭覚、色覚の語が「-み」派生名詞となる性質を保持している。そのような中でもととの語構成制限を逸脱する使用も発生しているものと考えられる。BCCWJの状況について水野(2017)は影山(1993)の指摘と合致しているとみなしたが、少数でも制限を逸脱する現象が発見されるのであれば、味覚、嗅覚、色覚の表現における「-み」の拡張性の現れとみなすこともできると考える。

4.3 「-み」派生名詞の表現上の需要

次に「-み」派生名詞が用いられやすい場面という観点から見ていく。

【形容詞】の「軽み」「細み」は日常的には耳慣れないが、俳諧の用語である。「軽み」については『日国二版』で「芭蕉俳諧の理念の一つ。(後略)」とあり、語誌として「連歌・茶道・華道などでも論じられた概念だが、特に俳諧における が知られる」と述べられている。この「軽み」「細み」については、(4)の建築、(5)の映画、(6)の茶席における書画についてなどの用例があり、これらは元の俳諧用語の延長線上にある意味で用いられているように思われる。

- (4) これと対照的な軽みと繊細で念入りな細工で江戸時代の建築様式の洗練の極致といってよいのが吉田邸で、西田伊作という棟梁の作品である。

(LBe1_00016,38970 『日本人の職業倫理』1990)

- (5) ルネ・クレールのな諧謔味、軽みがないわけではなく、それどころか、戦前のルネ・クレール・タッチがよみがえったような粋な映画であった。

(LBd7_00008,89410 『映画この心のときめき』1989)

- (6) 本席の床に、深草元政の歌入の文。寄付は酒井抱一の細みの粗画。

(LBj3_00032,11310 『グロテスクな日本語』1995)²²

このように、ある種の分野における特有の概念を表す語として古くから「-み」派生名詞が用いられており、『日国二版』に挙げられる分野に限らずその他の芸術分野にも使用が広がったものと思われる。

芸術分野という傾向は国語辞典に立項されていないような語についても見られる。4.1で稀な例としたもののうち【形容詞】【形状詞】【名詞】のみを集計すると84例あるが、そのうち42例が芸術等の鑑賞、批評の語であった。具体的には美術品、伝統芸能、音楽、詩、短歌、俳句、その他文学作品、建築、演劇、映画、各種展示品等の鑑賞や批評、語としては表1に下線を引いたものがその一覧であり、さまざまに造語されていることが分かる²³。

用例をいくつか確認しておく。

- (8) 鑑賞のポイント 形・肌 (金味) によって釜の類別を知り、それぞれの特徴を確かめることです。

(LB17_00032,34830 『わかりやすい茶道具の見かた』1997)

- (9) 茶色でざらついた土味が感じられる粘土。素朴な味わいは特に茶道具な

どでは高く支持されています。

(LBr7_00045,9740 『基礎から楽しく学べるはじめての陶芸入門』 2003)

- (10) 能の五番立分類の三番目に置かれるもので、舞歌を主とする幽玄味の濃い曲。
(LBf7_00043,51020 『虹を見る』 1991)

(8)~(10)は茶道具の釜、陶芸の土、能の謡など、伝統的芸術に関わるものだが、次の(11)(12)の映画のような近現代的芸術にもとくに【名詞】タイプの使用が目立ち、(13)のような外来語に付加するケースも出現する(対象はイギリスの蠅人形館の展示で、芸術とした中でも卑近な例である)。

- (11) その迫真味によって、見る者は、ますますフォンテーンの演ずる主人公に感情移入してしまう。(PB57_00171,7860 『常識として知っておきたい世界の名作映画 50』 2005)

- (12) 近未来世界のユニークなビジュアルなどの注目ポイントもある。多彩な娯楽味を、存分に味わい尽くしてほしい。

(PM51_00131,22880 『Weekly ぴあ』 2005年7月28日号)

- (13) 展示は次第にエログロ味を増していき、昼間っからビールでいい機嫌の観光客をうれしがらせ、子供を連れたお父さんお母さんを不安に陥れる
(PM32_00119,19290 『芸術新潮』 2003年8月号)

これについては鑑賞や批評という対象から感じられることに言及する必要のある場において、「具体的な感覚を名詞として表現する」機能のある接尾辞「-み」が表現として自然と好まれる、ということなのではないかと考える。このような、「感覚」を言語化しなければならないという表現上の需要がある場面においては、接尾辞「-み」はかなりの生産性をもつのではないだろうか。

4.4 「-み」の語基の範囲

次に、【形容詞】【形状詞】【名詞】の中で、4.3で確認したような特殊なジャンル傾向が取り立てて見られない稀な例について確認する。

「まるみ」「自然み」「伝統み」「複雑み」「平淡み」各1例は比喩的に味覚表現として用いられていた。「自然み」以下は漢語としての「味」と取ることもできる。これは4.2で述べた味覚表現における拡張性の一貫と考えておく。

その他の稀な例のうち【形容詞】の例を見ると、感情表現、人や事柄の性質、

外形的性質など、さまざまであった。

- (14) 十九の存在ぶりに、したたかな芸人であるべき自分がたぶらかされてきたことに対する悔しみもあった。

(LBh9_00140,53560 『灰左様なら』1993)²⁴

- (15) こんなところに女性への恋のつらみなど、例に出すべき必要もないのと思うが、このあたりが、子規の子規たる率直さ、正直さを物語る側面でもあるのだろう。(PM11_00735,31420 『本の窓』2001年12月号)

- (16) 漱石文芸の主人公達は、こうした淋しみの中で死と向き合う。

(PB19_00354,58270 『夏目漱石の作品研究』2001)

(14)は小説地の文における感情描写である。(15)(16)は文芸批評ではあるがその文芸そのものに対する評価ではなく作中に見られる人物の感情を述べているもので、迷うところだが4.3で述べた芸術の用例とはしなかった。

- (17) 気もアーカンジェルのそれと非常に似た清涼な透明感をもっているが、もっと明るく軽みがあり、強靱で生命力にあふれている。

(LBp9_00039,5660 『やさしい竜の殺し方』2001)

(17)はライトノベルの地の文で、「軽快な感じ」あるいは「軽やかな感じ」などの人の性質を表す例と見られる。

- (18) 自由に使えるお金があるっていうのも、(中略) そのうちには慣れっこになって新しみが薄れてしまうわ。(PB49_00087,93620 アガサ・クリ

スティー著/中村妙子訳 『娘は娘』2004)

- (19) 思ったより科白に軽みがあるし、テンポもいいよ。

(LBI9_00269,26560 『真夜中の女』1997)

(18)(19)は事柄の性質の例である。(18)は翻訳であるという点で一般の小説と文体的特徴が異なる可能性はある。(19)は演劇の台詞についてであり、4.3の芸術の用例の中に含めたものだがごく現代的な会話文の中での用例であり、単に「軽やかな感じ」を表す例としてもよいと思われる。

- (20) 盈は盈満の義であるから、柱というもおそらく太みのある圓柱の意であろう。(PB22_00045,1470 『白川静著作集』別巻 [3] 2002)

- (21) 段ボールは板よりも手に入りやすく、やわらかみも通気性もあるので、たいへん重宝しています。

(LBi5_00033,11930 『得する役だつ暮らし上手の知恵袋』1994)

(20)(21)は外形的、物理的性質について用いられている。(20)は漢字の字義に関する分析での使用、(21)は実用書ややインフォーマルな文体での使用である。

ここから少しだけ語基の意味的特徴に踏み込んでみると、小出(2000)が示す「内部性」について、感情、人や事柄の性質などはその観点が許容できるところもあるが、外形的なものには付かないということについては合致しない例が見られた。稀な例ではない「丸み(まるみ・まるみ)」は比喩的に人の性質や味覚などに用いられるが単に外形の表現にも用いられ、今回孤例であるが(20)「太み」(21)「柔らかみ」という例も発見された。比喩的に用いられることこそが重要であるとは考えられる²⁵し、例外としてしまうこともできるが、外形でも許容される現象についてはもう一段階説明を要するに思われる。

ほか、バリエーションに富んだ【形状詞】や【名詞】についての細かな検討も紙幅の都合上行えなかった。全体的な意味的制限の有無については今後の課題としたいが、あまり語基とならないような形容詞に「-み」が付く現象が、出版物という規範的傾向の強い媒体においても文体の硬軟に関わらず現れることは分かった。個人の言語感覚に基づくものと思われ、広く起こる現象ではないものの、ある程度の自由度が従来から内在していたものと見られる。

4.5 拡張はいつ始まったのか

ここまで、用例の年代についてはとくに取り上げてこなかったが、たとえば(11)は作者生年代が1950年代、(20)は1910年代であるなど、用例には文章特徴の差とともに使用者の年代の開きもある。取り上げなかったほかの例の中にも出版年がBCCWJの対象になっているだけで、実際は明治・大正期が初出であるような例も含まれる。年代による影響を加味した考察も必要であると思われるが、これに関連して、気に掛かるのは各種の“従来の「-み」派生名詞”はいつから用いられているのか、ということである。

『日国二版』は第一義として場所の意味を挙げ、初出例として『万葉集』の「繁美(しげミ)」を挙げるが、第二義の「その性質・状態の程度やその様子を表わす」については用例を挙げない。そこでいくつかの「-み」派生名詞を『日国二版』で引いたところ、初出例は古くても中世から近世初期のキリシタ

ン資料、多くは近世の戯作、漢語語基については近代以降であった。例を挙げれば「重み」は『日葡辞書』、「厚み」は滑稽本、「温かみ（比喩的）」は夏目漱石、「新鮮み」は内田魯庵が初出例である。すべての語を確認したわけではなく当然これらの初出時期は目安でしかないが、確認した範囲では場所以外の用法の発生は遅く、早くとも中世以降のように思われる。また漢語については「-み」の付きやすそうな抽象性の高い漢語の定着は明治以降に顕著であり、今回確認されたような拡張的な名詞への付加はそれ以降の現象と見てよいだろう。

我々が“従来の「-み」”と呼んでいるものの来歴もそう古いものではないようである。そうなると、接尾辞「-み」は中世以降ゆるやかに拡張し、近代以降は漢語を語基とする派生が増加、そして現代に至ってさらなる拡張を見せた、というような大きな流れが見出せるのではないだろうか。

詳細な調査を行ったわけではなく粗い観察による感触でしかないが、現代の新用法以前に「-み」に拡張の段階があったことは確かのように思われる。

5 おわりに

本稿の成果は第一にできる限りの事例のリストアップにある。BCCWJの全体を探索した結果、内省では得られないような「-み」が得られた。このリストの意味するところについては追うべき点が多く残されているが、ひとまず下記のような特徴は明らかになったと思われる。

- a. 場所を表す場合やオノマトペを語基とする場合については特定の表現しか見られない。(4.1)
- b. 味覚、嗅覚、色覚において、もともとの語構成ルールを逸脱するなど制限のない拡張性が認められる。(4.2)
- c. その他の品詞ではとくに芸術鑑賞・批評などにおける感覚表現において高い生産性が認められる。(4.3)

4.4 で見たように特定のジャンルに関わらない拡張的用例も得られたが、現段階でその意味的制限については不明である。今後の展開として分類語彙表番号による分析を考えている。加藤・浅原・山崎(2019)により、BCCWJの一部データには『分類語彙表』(国立国語研究所2004)による意味分類情報が付

されている。これを用いて、従来からの語基も含めて意味の傾向を観察することで、語基の意味的制限の有無について確認できる可能性がある²⁶。別稿を期したい。また、4.5 に示した非常に粗い仮説であるが、これについては国立国語研究所『日本語歴史コーパス』²⁷ で今回と同様の調査を行うことで、概要が知れるものと思われる。これも今後の課題とする。このような従来の接尾辞「-み」の状況と近年発生した新用法との関係（あるいは無関係）については、今後の新用法研究の成果に期待したい。

最後に、短い要素の探索における BCCWJ の活用方法についてだが、誤解析を想定した探索は取得データ量が巨大な割に有効な例は少数であった。また今回の事例で言えば、ほかに「味」と表記されている場合に語彙素読みが「アジ」と解析されている例等、稀な例はまだ隠れている。細かな作業とはなるが、稀な例を追いつけることは目視悉皆調査と比べれば手軽に実行可能ではある。とはいえ、どこまで実行するかについては目的に応じた適度な作業量を考えるべきで、今回の調査についてはとくに形状詞や名詞の拡張性の追究に今後の展望を見ることとし、これ以上の用例探索は行わないというのが妥当な判断であると考えられる。

注

- 1 BCCWJ の資料性についてはさまざまに論じられているが、開発者によるまとまった解説としては山崎編 (2014) がある。
- 2 国語辞典をいくつか確認すると、生産性の低さに関しては『日本国語大辞典第二版』(以下『日国二版』) に「「さ」と比べると使われ方は限られる」、『岩波国語辞典』(第八版) に「「-さ」より付く語が限られ、かつ外形より内面の捉え方に傾く」の記述が見られたが、当然辞書としてその「限られた」語のすべてを一覧にするような記述は行われない。
- 3 BCCWJ に例が見られない、または少数例だったものを入れれば 60 語であったことも示されている。水野 (2017:169) もこれに倣い、同様の判別を行っている。また太田 (2017:86-87) は逆引き国語辞典を用いた「形容詞語幹+み」のリストアップを行い、やはり約 30 語を挙げている。
- 4 一例として『日国二版』の意味記述には「形容詞または形容動詞の語幹に付いて名詞をつくる」とあり、「真剣味」が例に挙げられている。
- 5 () 内は杉岡 (2005:78) が挙げている事例である。筆者の内省ではこのうち「つるみ」に不自然さを感じるが、実例であることが付記されている。

- 6 中納言 2.4.5 データバージョン 2020.02 <https://chunagon.ninjal.ac.jp/>
- 7 ただし後述の検索条件 1 についてはデータダウンロード制限値の 10 万件を超えるため、出版サブコーパスとその他の 2 回に分けてデータを取得した。
- 8 以下、| が短単位の切れ目、/ が最小単位の切れ目を示すものとする。
- 9 短単位については国立国語研究所コーパス開発センター (2015) 第 5 章、より詳しくは小椋ほか (2011) 参照。「接尾的要素」についてもリストがある。
- 10 形態論情報のラベルについての詳細も注 9 同様。
- 11 「形容詞語幹 + み」と動詞連用形型名詞が同形の語についてはすべて動詞連用形型名詞とみなし、対象外とした。例：緩み、苦しみ、慈しみ、親しみ、弛み、痛み、悲しみ
- 12 接尾辞「- み」の前に来る語が解析できず「未知語」の品詞情報となっているものが 8 件あるが、まとめて 1 語彙素として異なりを集計した。
- 13 接尾辞「味」には「醍醐味」「収斂味」「苦渋味」といった漢語としてそもそも「あじ」を意味する語もあり悩ましい。今回は味覚を表すもののうち「漢語 + 味」のものは対象としなかった。ただし「果実味」は果実そのものではないものに対して用いられることがあるので、対象としておく。
- 14 『日国二版』を確認し接尾辞「- み」由来であるとの記述があるもののみとした。たとえば「妙味」は「非常にすぐれた味」とあるため、「妙だ」のような形容動詞からの派生ではないと判断する。「情味」「涼味」などは同根であると考えられ杉岡 (2005) は接尾辞「- み」として扱うが、『日国二版』にはその言及はなく、今回はこの種の非自立の形式との結合は除外した。また「甘味 (カンミ)」「臭味 (シュウミ)」と解析されているものには「アマミ」「クサミ」と読むべき事例もありそうだが、今回はその確認は行わず除外した。「色味」は『日国二版』に立項がなく、多くの国語辞典と同様である。『明鏡国語辞典』(第二版) は「それぞれの色をもつ独自の味わい」とするが、「その色の感じ」という意味であると考え、対象とした。今回抽出された「金味」「土味」も類例で、「その金肌の感じ」「その土の感じ」という意味であると思われる。
- 15 今回の抽出作業において、一見新しい「- み」の用例と見紛う例があったため、参考までに示しておく。②は「大泉洋みたい」と言いかけて濁す(「ry」は「略」というネットスラング的表現であり、③の「無理」のあとの「ミ」はその後の絵文字の一部である。
- ② キムタクの髪型が大泉洋み try (OY15_00791,3080 Yahoo! ブログ 2008)
- ③ その前に買うこと自体無理ミ (ノ__ __) ノ = 3 コケッ
(OY15_03834,490 Yahoo! ブログ 2008)
- 16 表 1 に示した語基の表記は BCCWJ の語彙素表記に基づきつつ、分かりにくいものは平仮名に開くなどの変更をしている。また「- み」の部分は「味」表記のものも含むが代表させて「み」で表記した。
- 17 【色】は基本的に「赤い」等の形容詞からの派生と考えておく。【場所】に分類し

- た「深み」には「深い様子」を意味する例もあるが、便宜上その区別はしていない。「強み」「弱み」は抽象的な「所」であることから今回は【場所】に分類した。
- 18 「薄み」は一般の語ではなく囲碁の用語であり、用例もすべて囲碁の解説であった。4.3 で述べる古くから用いられるある種の分野の特有語の一種であるとは思うが、今回は扱わない。
- 19 「黄色み」は「きいろい」の形で形容詞化した上で派生名詞化したものであると考えられ、形態素への意識は薄くなっているが、「銀色」についてはそれとは異なる。「有り難い」も派生接辞としての「- 難い」の意味機能が意識されないものであり問題としない（だからこそ本来単一形態素にしか付かない「- み」が付くことが早くから一般化したものと考えられるだろう）。
- 20 出典情報は基本的に（BCCWJ 上のサンプル ID, 位置情報 書名等 発行年）の形で示し、必要に応じて情報を付加する。サンプル ID は "LBh7_00036" であれば、図書館サブコーパスの書籍、NDC「7 芸術分野」などの情報を示している。詳細は国立国語研究所コーパス開発センター（2015）第7章参照。
- 21 「くどい」は比喩的な味覚表現で【形容詞】に分類すべきだが、出現は1件のみでありそれが味覚の例であったため、今回はこちらに分類した。
- 22 文脈を確認するに、別書籍からの引用箇所。本来の出典は江守奈比古『懷石料理とお茶の話 八百善主人ものがたり』（海南書房、1964）。
- 23 杉岡（2005:79）は拡張的な事例について「新たな語が作られたという造語的ひびきを持つものが多い」と述べるが、筆者もこの感触に同意できる。
- 24 本稿で示した検索によって得られた「悔しみ」4例はすべて韻文における使用であったが、別途確認したところ「| 悔 | しみ |」と誤解析された例が2例あり、そのうち1例がこの⑭である。一般の現代語といえる「悔しみ」は実質この1例となるため、検索条件からはずれる例だが示した。
- 25 小出（2000:7）は温度形容詞のうち「- み」が接続可能なのは「暖かい」のみで、「暖かみ」は「具体的な生理感覚を表すものはなく比喩的なものだけである」と指摘する。
- 26 宇野（2018）でもオノマトベを語基とする「新しいミ形」について既存のシソーラス系オノマトベ辞典を参照して特徴を分析している。
- 27 『日本語歴史コーパス』概要 https://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/chj/

参考文献

- 宇野和（2015）「Twitter における「新しいミ形」」『國文』123、pp. 106-94、お茶の水女子大学国語国文学会
- 宇野和（2018）「Twitter にみるオノマトベに後接する接尾辞ミの機能」『比較日本学教育研究部門研究年報』14、pp. 183-189、お茶の水女子大学グローバルリーダーシップ研究所
- 太田聡（2017）「日本語の名詞形成接尾辞「- さ」と「- み」について」『音韻研究の

- 新展開 窪園晴夫教授還暦記念論文集』 pp. 84-97、開拓社
- 小椋秀樹・小磯花絵・富士池優美・宮内佐夜香・小西光・原裕 (2011) 『現代日本語書き言葉均衡コーパス』形態論情報規程集：第4版(上)(下) 国立国語研究所内部報告書
- 影山太郎 (1993) 『文法と語形成』 ひつじ書房
- 加藤祥・浅原正幸・山崎誠 (2019) 「分類語彙表番号を付与した『現代日本語書き言葉均衡コーパス』の書籍・新聞・雑誌データ」『日本語の研究』15-2、pp. 134-141、日本語学会
- 小出慶一 (2000) 「形容詞の意味の一側面 「～まる」と「～み」のつく形容詞」『群馬県立女子大学国文学研究』20、pp. 1-13、群馬県立女子大学国語国文学会
- 国立国語研究所編 (2004) 『分類語彙表増補改訂版データベース』
https://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/archive.html#bunruidd
- 国立国語研究所コーパス開発センター (2015) 『現代日本語書き言葉均衡コーパス』利用の手引：第1.1版
https://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/bccwj/doc.html#01
- 杉岡洋子 (2005) 「名詞化接尾辞の機能と意味」『現代形態論の潮流』 pp. 75-94、くろしお出版
- 林巨樹・斎藤正人・飯田晴巳 (1973) 「古今形容詞一覧」鈴木一彦・林巨樹編 『品詞別 日本文法講座 形容詞・形容動詞』 pp. 208-231、明治書院
- 水野みのり (2017) 「ネット集団語における接尾辞「-み」の語基拡張」『思言 東京外国語大学記述言語学論集』13、pp. 167-174、東京外国語大学地域文化研究科・外国語学部記述言語学研究室
- 山崎誠編 (2014) 『講座日本語コーパス2 書き言葉コーパス 設計と構築』 朝倉書店

付記

本稿は科学研究費補助金(基盤研究(A) 課題番号17H00917)の研究成果の一部である。

(文学部准教授)